

聖書は大ドラマである

舊約聖書（一月—八月）

1月1日

天地の創造
(創世記1:1-2:3)

元始^{はじめ}に神は天地を創造した。(創一・二)

聖書は神の啓示の書、超科学の書である。聖書は永遠に実在する神が、古代ヘブライ(イスラエル、ユダヤ)人に体感させた行為と言葉の劇的現実を伝えている書である。

天地の創造によって宇宙(空間)に歴史(時間)が始まった。この歴史には元始^{アルファ}があったから終末^{オメガ}がやってくる。聖書の創世記がその元始を語り、黙示録がその終末と新天地の到来を預言している。

創世記第一章(一・二・三)を見ると、神は六日間で創造の業^{わざ}を成して第七日目に安息した。この神話的表現から七日目毎に神との平安に入る安息日を迎えることになった。

ところで神は創造の業の一つ一つを見て「善し」(文語訳)「良し」(口語訳)とした。原語(ヘブライ語)では「トブ」だが、この語はこの場合善悪良否の判断ではなく、「結構だ、わが意を得た」という意で「美し、好いかな」という善悪の彼岸的な神意と私は見る。楽園喪失^{グエスト}以前の創造の神品であるからだ。因みに、「美」という漢字の構成は大羊で、大きな羊の毛は美しいという美観に由来している由。創造の天地は正に美しかったのである。その第一の業は「光あれ!」で即「光があった」。光は宗教界、自然界の神秘的根源現象である。キリストや釈尊、聖者高僧の後光は靈界の光、元旦の旭光は自然界の光。我らも全身光に貫^{つらぬ}かれよう!

1月2日

人の創造

(創世記1:27, 2:7)

神は人をおのが相に創造した。……男性と女性に神は彼らを創造した。
(創一・二七)

混沌たる宇宙に神の靈氣が漂うていたが、神は先づ光を創造し、天には日月星辰を配し、地には諸々の植物、爬虫類、海には魚類、空には昆虫類鳥類を創造した。そして最終段階に人類の創造にとりかかった。これが第一章の創造譚であるが、この第一章第二七節は神秘的な人間の本質を告げるもので、この一句を全存在を以て信受する人は本当の幸福を知るにちがいない。知るとは全存在で体感体認することを謂う。

神が神の相に即して人を創造したという。神は無相の相である。人間の側からは端倪すべくもない。靈的な実在を偶像化してはならない。その無相の相に即して創造された人間は神性を宿した。だから人は神の現象体である。本来極めて神秘的存在なのである。日本の古代人も人を靈止、神靈の止まる存在と解した。仏教でも衆生悉く仏性ありと称う。であるから魂がある限り、人は宗教界に属している。万人は宗教人である。男性も女性も神性を宿している。神の「似姿」という訳はおもわしくない。

さてまた第二章七節の神話的表现によると、「実存主神は大地の土で人を形成してその鼻に生命の氣息を吹き入れた、すると人は生氣魂となった」とある。即ち人は天的な靈氣と地的な要素から成る天地融合の靈肉渾然たる靈幸う生命体！豊かな人間性よ！

1月3日

夫婦一体
(創世記2:18-25)

これぞわが骨の骨、わが肉の肉。(創二・二三)

創世紀第二章の神話によると、神は万物創造の終りにアダム(大地を素材として作ったので地人と謂う)を創造したが、彼が孤独でいるのは結構なことではない。彼に適う助者を作ってやろう。そこで神は彼に手を按いて深く眠らせて、謂はば靈的麻睡状態として、彼の心臓部とおぼしき肋骨を取り出して、女を創造した。アダムは睡りから覚めると、神が女をアダムの面前に伴れて来た。驚き喜んだアダムは感激のあまり叫んだ。

これこそ私の骨の骨だ、私の肉の肉だ！ その名は、女だ、男から取られたからだ。

この神話的太古の詩句は驚くべき傑作である。本来個たる単独存在が、神の憫みによって男女という相対存在となった。だから「二人一体」たる原始の夫妻が茲に成った。であるからアダムの叫び「これぞわが骨の骨、肉の肉」はエバ(原語は「ハッワー」で生者、及び生命づける者、即ち「生きものの母」の意となる)(三・二〇参照)にとつても同じ叫びとなる。夫婦愛を表現してこれに優るものがあるうか。現代人よ原始に還れ！と謂おう。

生きとし生けるもののうち エバの姿に比ふもの(註)これは私の「楽園喪失」という讃歌ひとつもあらずエバの美は 神の芸術の傑作ぞ！(十節から成る)の第五節・歌調「奇葉茂れる東西古今に謳はるる 美の極致こそ女体なれ

照

櫻井の」第八巻「詩歌集」三三五―二七頁参

1月4日

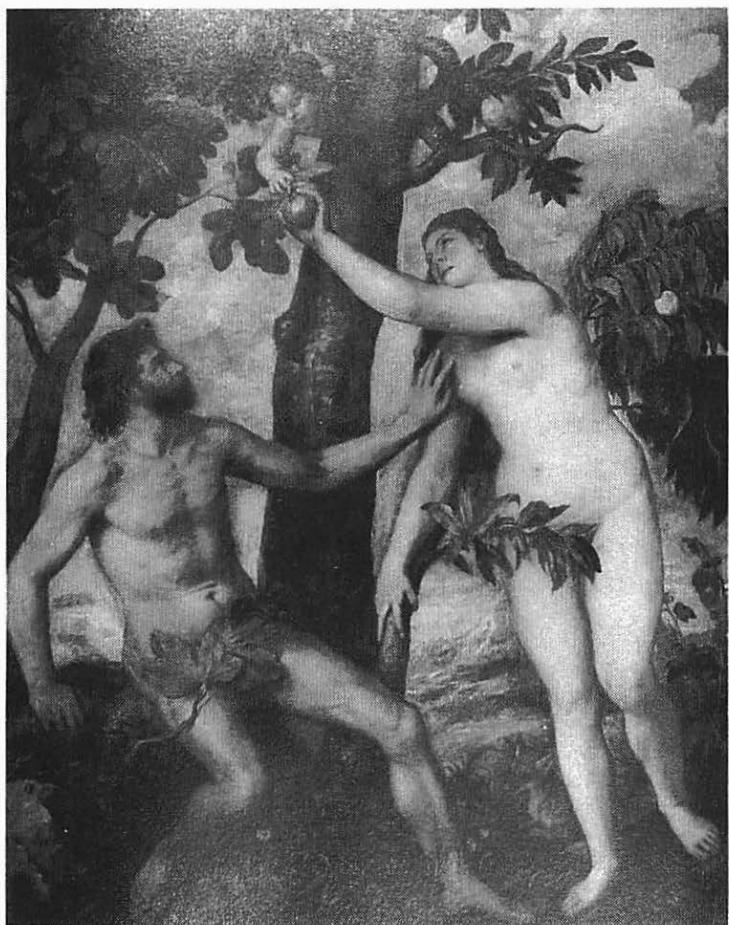
樂園喪失

(創世記2:8-17, 3:1-24)

汝おまえは何処どこに居いるのか (創三・九)

ユーフラテスの上流地方と思つたらよい、エデンの東の方に神は園を設けて、その園に見て美しく、食べて美味い各種の樹々を生ぜしめ、真中には生命の樹と善悪を知る樹を植えた。そしてアダムにこう言つた、どの樹の果もお前は「食べに食べて」(自由に食べて)よいが、善悪を知るの樹はだめだ、それを食べた日にお前は「死を死ぬ(必ず死ぬ)ぞ」と。ところが狡猾な蛇、サタンの使者がエバに、善悪を知るの樹を食べて神さまのようになつたら好い、と唆そそかしたので、彼女はその口車に乗つてその実を食べ、アダムにも食べさせた。二人は直ちに善悪を知つて、神の言に背いたという意識のもとに、木の下蔭に身を匿した。すると神はアダムに「お前は何処に居る!」と問いかけた。この神の声には審判と愛憫の両音がひびいている。ところがアダムはエバに責任をなすりつけ、エバは蛇のためだと罪を転化した。これがため二人は樂園から追放された。

以上が樂園喪失神話のあらまじだが、寔に人間の現実相を深刻に表わしている。アダム・エバの原罪は、そのまま我々の我執の罪である。万人は救を要する。我々も「汝何処に在りや」と神に呼びかけられたら、直ちに神のみ許に立ち帰ろう。神は無条件に立ち帰りを欣び、迎へて抱き入れ給う。



(創2：17：3：1—8) 蛇の誘惑によりエバとアダムは禁断の木の実を食べる (ティツィアーノ)

1月4日

楽園喪失の歌

作詞：1980・11・28

歌調：「宵葉茂れる桜井の」奥山朝恭作曲

1.

地は形なくただ空（むな）し 淵のおもてはただ闇し
神のみ霊は水面を いとくすしくぞおほいける
神は叫べり「光あれ」！ ここにはじめて光あり

2.

神のみ業のいやはてに 人を創造れり地をもて
神は霊気をその中に 吹き入れたれば生氣あり
そのすがたこそみ像に 一如なりけれあなかしこ

3.

空には鳥が飛びかわし 地には獣が遍いまわる
されどアダムは独りにて 彼の相手はなかりけり
神は不憫に思いやり アダムをじっと見つめけり

4.

神はアダムに手を按きて 深き眠りにおとし入れ
肋骨を一つとり これを女に創造たり
アダムはエバを見て言へり「わが骨の骨 肉の肉」

5.

生きとし生けるもののうち エバのすがたに比うもの
ひとつもあらずエバの美は 神の芸術の傑作ぞ！
東西古今に謳はるる 美の極致こそ女体なれ

6.

エデンの園はパラダイス アダムとエバは思うまま
楽しきくらしをいとなめり これをねたみて木蔭より
サタンの使者 美しき蛇 エバに近よりささやきぬ

1月4日

樂園喪失の歌

作詞：1980・11・28

歌調：「青葉茂れる桜井の」奥山朝恭作曲

7.

「善きと悪しきを知るの樹を 汝れら喰はば開眼し
神の如くに成るべし」と エバは巧みに騙されて
禁断の果をまづ喰い アダムも共に喰いけり

8.

神の言に叛きたる 二人はここに罪を知り
木の下蔭に身をかくし 神のみ前を恐れたり
ときに声あり「わがアダム 汝いづこに今在るや！」

9.

神のみ言いと深し さばきとあわれみひびきたり
さあれ二人は樂園を 追い出されて荒れし地に
汗を流して働きて なりわいたつる道に就く

10.

されどみ神は約しけり「汝の裔にメシヤ出で
蛇の首領にうち勝ちて 救いの道をきりひらき
罪のゆるしを必ずや 与うべければ平安かれ！」と

1月5日

アベルの血の聲

(創世紀4:1-15)

汝の兄弟はらからの血の聲地ちより我に叫べり(創四・一〇)

アダムがエバをからだで知って、カインとアベルを生んだ。カインは農耕者となり、アベルは牧羊者となった。両者とも神に供物を捧げた。ところが神は兄カインとその供物を顧おもひなかつたが、アベルとその犠牲的供物なる羔こひつじを顧おもひた。それでカインはこれを不満として怒った。神は供物を誇り氣に供えたカインの心を見給うたのであろう。アベルは全身的な献供の心で羔の「初生」を供したのであった。

カインは弟アベルを妬み恨んでこれを打ち殺した。神はカインに「お前の弟アベルは何処に居るのか」。カインは「知りません」と偽いつはりった。神は更に、「お前は何をしたのか。お前の弟の血が大地から私に叫んだのだ！」彼は地に咀くはまれて耕作がものにならず、流浪りうりやう人になった。彼は罪の呵責に耐えかねて、神に「私の罪は大きすぎて負うことができません」と告白した。神はこの砕けた心を受けて罪をゆるした。

アダム・エバが神意に反したので神との縦の關係が破れた。その二人から生れたカインとアベルに於て殺人という怖るべき罪が生じて横の關係が破れた。縦横のこの乱れを如何にせん。人類の個人、社会、國際間の乱れや破れは歴史の終末まで続く。アベル以来の血はキリストに到つて贖罪の血となり、救済の道が拓かれているのに！

1月6日

エノクの歩みと昇天

(創世紀5:21-24)

エノクは神と共に歩いて^{ある}いたが、居なくなった。神が彼を取り去ったので。(創五・二四)

アベル(ヘーベル)の死を継いでセツ(シェーツ)が生れた。アダムから数えて七代目がこのエノク(ハノーク)で、彼は六十五歳のときメトセラを生み、爾来三百年間神と共に歩いたが、ある日突然居なくなった。彼は靈化されて神に天界へ取り去られたのであった。彼の地上の生涯はふしぎにも三六五年間で、一年の三六五日と同数であるとは。

神と共にという事態が特記されているのは、彼が私意を去って神意と一つになって生活したことを意味する。即天去私の無私実存の在り方であった。相手が神だから、その歩き方は天衣無縫的な自由である。神と共にというのは、すべしすべからずといった道德的、律法的な消息より次元の高い在り方である。聖意がおのづから体現されているのである。相対界の見ゆるエノクの奥に絶対界の見えないエノクが在って一つに融合しているような相である。それ自体が不死の相である。三百年というが、それは一日千年の質、今日即永遠の質なのである。此岸即彼岸なのである。

「居なくなった」の原語は「アイン」という原語から来ている「エーネンヌー」で無、不在、無人、無一物などの意味を有つ表現で、靈神と共に靈化されて靈界にすがたを消したわけである。靈体を与えられた靈人として去った。預言者エリヤと共にキリストの先驅的存在であった。

1月7日

ノアの大洪水
(創世紀8:1-9:17)

鴿たそがれ黄昏に彼に還った。視よ、その嘴くちに摘つみたての橄欖オリブのいと葉はが。(創
八・一二)

ノア(ノアハ)の大洪水の物語は創世紀六・五―九・一七に記されてある。人間界に諸悪が跋扈して「人の心の思い慮ははるところただ悪のみ」という墮落荒廃はらぶりを神は視て人を作ったことを痛く悔い、悲しみと怒に堪えないのであった。

ただ「ノアは義人で彼の同輩の中で完全な者で、神と偕ともに歩いた」(六・九)。それで神はノアに糸杉材ゴフエルで方舟はふねを作ること命じた。山間で造船とは何ごとかと彼は思ったが神命に惟ただれ従った。それは正に巨船であった。方舟に乗り込んだのはノアの一族(セム・ハム・ヤベテ三大種族の源)と獸類、爬虫類、昆虫類、鳥類の雌雄であった。

やがて神意動くや大洪水が襲いかかった。さしもの山地も大海原と化した。島と変貌した高山アララットに方舟が止まったのは数ヶ月も経つてのことであった。ノアは鴿を放つて陸地を偵察させたが空しく還つて来た。七日経つて再また放つた。すると黄昏に斜陽を浴びて孤影が！見よ、その嘴に緑葉が！橄欖オリブのひと葉はであった。ノアは洪水が減いた新天地で新たに仕事にかかる希望の徴をこの橄欖のひと葉はに見た。

神は審判を世界史上で、大暴風雨、大地震、火山の大爆発、大戦乱等を以て降くだし給う。そのような苦難のどん底で平伏して祈り、靈鳥の一葉を靈視せん哉！

1月8日

バベルの塔
(創世紀11:1-9)

全地は同一の音声と同一の言語であった。(創二・二)

創世記第十一章——九節は有名なバベルの塔の物語であるが、アダム・エバから由来している太古の世界では同一言語であったという。ユーフラテス大河の中流河畔のシナル(バビロニヤ)の地のバベル(バビロン)の人達が壮大な櫓型の塔を建て、その塔頂が天にまで達く摩天閣を創作し始めた。神はその高慢な文明意識を嘉しとせず、彼らの言語を乱して相互に意志が通じないようにした。それで建築を放棄して彼らは地の四方に散った。バベルの塔はこの物語から文明の崩壊を意味する塔のこととなった。

この二十世紀末文明はバベルの塔的な人本主義的バビロン文明の極限状況ではないか。人類は地球とその動植物によつて生命を保っている。その地球は太陽に絶対依存している。即ち人間は地動説を真理としている自然的存在である。魂をもった霊的存在たる人間は霊界の絶対的存在たる神に拠る存在である。これは神本主義であり、謂はば人動説である。だから霊的コペルニカスの転向を今こそ新たにすべきである。

いざ霊肉渾然として神と太陽の愛の霊と力を以て生活しよう。各民族はその言語を語りながら同一なる神の根源語のひびきを感じ、多即一、一即多の和合の心境となり、他国語を知る楽しみを覚え、民族歌謡を互に歌って楽しもう。ハレルヤ!

1月9日

アブラムの出ハラン

(創世記12:1-9)

¹ 実存主^{エホバ}アブラムに言ひ給ふ「^な汝が地を出でに出でよ! ^な汝が親族を離れ汝が父の家を出でてわが汝に示す地に行け。 ² 我れ汝を大民族と成さん。汝を祝福し、^な汝が名を大ならしめん。かくて汝は祝福そのものたらん。(創二二・一二)

アブラム(神との契約の後アブラハムと改名)(二七・四、五)の故里はユーフラテス下流西域のウール(光)であるが、父テラはこの天体礼拝宗教の地を去って北西はるかなるハランの地に移住した。父の没後家長アブラムにある日神が上掲の如く語りかけた。アブラム(七十五歳)は神命に従って決然と立ち出でた。どの道を何処へとも知らずに。しかし旅路の先導者は神とその声である。導かれてカナン(今のパレスティナ)の地へ向ったのであった。時は紀元前二千年の頃である。アブラムは神に信従しつつ、祝福の約束にあづかり、信仰の祖たるにふさわしい生活をおくる。アブラムはその信仰の故に万民の祝福の基となった。

さて我々も人生の旅をしているのだが、ある日「出でよ!」との神の声を聞いたら、その現場、現職、現況から立ち出でよう。人生の峠であり、岐路である。このような神の声を聞くには日常生活に於て、よく神に祈り入ることだ。神・キリストの懐^{よきこころ}に己れを投身して。神の祝福は隣人^{ひと}へ祝福を領ち与えざるを得ない質のものである。

1月10日

信義一相
(創世記15:1-7)

五・六
アブラムは実存主を信じた、神はこれを彼の義となし給うた。(創一

アブラムがハランを立ち出でたときは既に七十五歳であつたが、今や八十歳を越えていゝるのに妻サライとの間に嗣子が出来ないので悩んでゐた。すると或る夜、神がアブラムを幕屋の外に呼び出して、「さあ天を仰いで星を数えて見よ、あれが数えられるかね。」神は彼に言った、「汝の裔もこう成るよ」と。「彼はエホバに信じ入った。そこで神はこれを彼に對して義とみなした」(直訳)。

信仰とはこのアブラムのように、自分の經驗的判断や常識を乗り越え、神意、神言を全存在を以て信受することである。おのれを否とし、神を然りとする、即ち一と十だからそこに靈的放電、火花が散るような関係である。

信仰とは神の言または行に圧倒されて、全存在を以て神の中に信入する内的靈的行為である。だから信仰とは仰ぐのではなく行くのである、信仰である。するとその状態は神の中で信交的一如の相となる。かかる信を神は義とし給う。信義一相である。一般に「信仰によつて義とされる」信仰義認という神学的表現が觀念化してゐるので私は敢てここに新宗教改革の原点があると申したい。本当の信仰とは神・キリストの神行に圧倒されて信入する信即行、信仰一相で、そこにはキリストのみ靈の力が必然臨むのでそこから外的行為がおのづから発するといふものである。

1月11日

義人の力
(創世記18:22-33)

神言ひ給ふ「十名居らば我れ滅ぼさじ」(創一八・三三)

塩の湖(死海)の南方低地の町ソドムの道德的荒廃、風俗紊乱のため神の審判が予感されたのでアブラハムは神エホバに訴ねた、「貴神は義人を悪者と一緒にお滅しになるのですか。若しこの町に五十人の義人がいたら、どうなさいますか。」「我はその五十人のゆえに滅ぼさない」アブラハムは更に四十五人、三十人、二十人と格さげをして遂に「十名居たら」と迫った。神は「十名居たら滅ぼさない」と言つて問答は終つた。しかしソダムにもゴモラにも十名の義人が居なかつたと見えて神の審判が降つて硫黄と火で焼き滅ぼされた(一九・二四)。

南王国ユダが滅亡する夕暮時に預言者エレミヤに神は、「もしエルサレムに一人の公義(審判と同語)を行い真理(神然たるもの)を追求する者を発見したら、これを恕す」と言つた。神の前に神然たるものを行ずる義人はキリストの他に一人もない。パウロが「義人なし、一人だになし」と告白したのはこのことで、神意を完璧に行じ聖意を體現したキリストの十字架の死が贖罪の力をもっていた。そしてこの贖罪の絶対恩寵は地の極までも世の末までも現実の力をもっている。問題はこれを全存在を以て体受するか否かにある。体受すれば聖霊が臨んでくる。

1月12日

独子の献供

(創世紀22:1-19)

10 アブラハムは手を伸べ刀を執つてその子を屠ろうとした。11 時にエホバの使者^{つかい}天から彼を呼んで「アブラハムよ、アブラハムよ」と言った。彼は応えて「ハイ！ 御覧の通り！」12 使者は言った「お前の手をその子にかけるな、彼に何もするな。今や私は知った、お前が神を畏れる者だということを。即ちお前の独子^{ひとりご}をも私の為に惜しまないから。」(創三・一〇—一二)

砂漠の宗教は犠牲的供物が特色だが、これは動物でなくて人身御供^{ひとみご}で全く異例である。神が特例を以てアブラハムの信仰を試みようとした。即ち彼の愛する独子をモリアの山で燔祭として献げよ、という神命であった。彼は黙ってこれに従い、独子を伴れて旅にのぼった。これは正に信仰ではなく信行である。自刃を命ぜられるよりも辛い行為である。“No reason why, but to do (go) and die (kill)” (テニソンの詩句)「何故との理由なくただ実行して(往きて)死する(殺す)のみ」であった。この信を嘉して神の使者が燔祭を中止させた。アブラハムが信仰(行)の祖と謂われるのはこの信即行が焦点である。同じ神は自ら独子ナザレのイエスを人類の贖罪のため十字架に懸け給うた。我々にとって信仰(行)は十字架道で何らかの意味で人の為己を与えることである。



(創22：1－12) アブラハムは独子イサクを献供せんとする（レンブラント）

1月13日

ヤコブの石枕
(創世記28：10-22)

畏るべき哉この処。これは神殿に外ならず、またこれは天門である。

(創二八・一七)

イスラエル父祖時代の三代ヤコブの父イサクは、ヤコブに、先住民族カナンカナンの女を娶とるな、上部メソポタミアのバダンアラムへ行つて母方の伯父ラバンの娘を娶れと言つた。ヤコブはそれでハランの方へと旅に出た。旅路で日が暮れたので路傍の石を枕にして眠つた。夢の中で天地にかかる梯はしを天使はしだてが昇り降りするのを見た。すると、我はアブラハムの神イサクの神エホバである。お前が枕している地をお前に与える、天下の諸族はお前の子孫によつて福祉にあづかる、我はお前と旅をしてお前を護り我が語つたことを実現するまでお前を離れない、という主旨を告げた。目醒めてヤコブはエホバが此処に在ますを知らなかつた、畏るべき哉此の処、此処は神殿だ、天門だと独語した。

ヤコブの石枕の旅寝に於ける啓示は、夢であつて夢ではない。靈の現実である。神共に在ます処、そこが動的な神殿であり天門である。人生や世界の歴史は、神と共に旅をすること、宗教は動的な相に於て活きていることの啓示である。後の神殿宗教、教会堂宗教に對して宗教改革を預言している。宗教の活きた相は旅の幕屋にあることが創世記から黙示録まで聖書が事実伝えているところである。而も神・キリストのみ靈が内在し給うとき旅人自らが神殿であり、天門である(エペソ二・二三参照)。



(創28：10-17) ヤコブ石枕の夢で天の梯を天使が昇り降りするのを見る

1月14日

ヤボクの渡し

(創世記32:23〔22〕—33〔32〕)

彼言へり、汝が名は最早ヤコブと称はるべからず、イスラエルなり。そは汝神及び人々と戦ひて勝ちたればなり。(創三・二九〔二八〕)

ヤコブは神と共に旅をして目的地に着いた。そこで伯父ラバンの娘ラケルに出会ったので嬉しさのあまりラケルに抱きつき接吻をして声を揚げて泣いた。彼は腕力も強い熱血兒である。彼はハランの地で四人の女を知り、十二支族の基たる男兒を授かった。即ち最愛のラケルはヨセフ、後にベニヤミンを、ラケルの姉レアはルベン、シメオン、レビ、ユダ、イツサカル、ゼブルンを、ラケルの仕女ビルハはダン、ナフタリを、レアの仕女ジルバはガド、アセルを産んだ。彼らと牛や羊や驢馬の群を引きつれてヤコブは帰路を辿り、ヨルダンの東ヤボクの流れの渡しで、彼らを夜陰に對岸に渡して、ヤコブ独り残っていた。すると見知らぬ影が現われて彼と相撲をとることになった。ヤコブは横綱の実力があつたと見えて相手をなやまし抜いた。すると相手は靈力を使つてヤコブの髀の板骨をはずした。夜が明け初めたので相手は去ろうとした。するとヤコブは「汝我を祝せずば去らしめず」と言つてしがみついた。相手は神か人か、単数か複数か。とにかく相手は宣言した。もう汝はヤコブではない、イスラエルが汝の名だ、神と人を相手に戦つて勝つたからだ、と。「イスラエール」は「神と取組む者」、神に負けて、神の勝利を賜つた者の意である。イスラエルは正に神の戦を戦う使命を荷う民族となつた。



(創32：22 [23]—[33]) ヤコブはヤボクの渡し場で神の使いと相撲をとり、イスラエルの名を賜る

1月15日

ヨセフの生涯

(創世記37-50)

私を此処に遣わしたのは君たちではない、神である。(創四五・八)

創世記の最後の劇はヨセフの生涯である。第三章から第五〇章まで。これは誰が読んでも感激しないでは居られない記録である。是非読んで下さい。

ヤコブ(イスラエル)の十二名の男児のうちラケルが産んだ宝の子ヨセフはヤコブに特愛された。長男ルベンの他の兄たちは彼を妬んだ。ヨセフはふしぎな夢を見る子で、而もその夢の啓示を知る靈的素質をもっていた。兄どもに棄てられ穴に投げ入れられた。アラハムとその侍婢なるエジプト人ハガルの間の子イシマエルの隊商が通りかかったので兄どもは彼を銀二十枚で売った。ヨセフはエジプト王(通称パロ)の侍衛長ポテバルに買われ、やがて近侍にされた。ポテバルの美貌の妻の誘惑を斥けたが偽訴されて投獄。しかし獄中でも神共に在まし、パロの夢の解明で彼は認められ、牢から出される。「神の靈の宿れる此の如き人を見出し得んや」とはパロの感嘆の言葉であった。七年の大豊作、七年の大凶作の預言もその通り。カナンも飢饉に襲われ、ヤコブがヨセフの兄どもをエジプトへ救を求めて遣わすこと再度。彼らに売り飛ばされたヨセフは彼らを露恨まず、遂に自分がヨセフだと名乗る。兄たちの驚愕! しかしヨセフは言った。私を此処に遣わしたのは神様で、皆さんを救うためだったと!

1月16日

モーセの生い立ち
(出エジプト2)

彼女その名をモーセ(援出^{ひきたし})と名づけて言った、「水の中から私が彼を援き出したからよ。」(出二・一〇)

ヨセフの族を中心としたイスラエル民族の一部はその後三百年ほどエジプト王朝の配下で半奴隷状態の苦役に従事していた。紀元前十三世紀のラメセス二世の頃レビ族の女にある男児が生れた。美事な赤児であつた。ヘブル人の勢力が増大してきたので生れる男児は殺される指令がでていた。母親は葦(ぶし)の箱にアムナト青を塗つてその中にこの子を入れ、河辺の蘆(あし)の茂みの中に浮べ匿した。これをパロの王女が河でナイル躬(からだ)を洗うとき発見した。が王女は王命に反してこの男児を憐み、育てさせて遂に養子として受け入れた。河辺から援き出したという意味でモーシェ(援出^{ひきたし})と名づけた。モーセは宮殿生活でエジプト文化の粹を習得し(行伝七・三二)、指導者たるの内実が備わつて来た。彼もヤコブの如く剛健な体力を有つていた。若者どもの喧嘩の二件に因つてエジプトに居る身の危険を感じ、ある日姿を晦まし長驅してシナイ半島の東の対岸ミデアンの地に亡命した。

このミデアンの祭司リウエル(エテロ)の七人の娘たちを助けて羊群に水を飲ませてやつた。これが契機となつて彼自身牧羊者とされて暮らしていた。その娘たちの一人チツボラと結婚する。男子が生れる。これが生い立ちのあらましかが、特にエジプト王女の特別な憐みによつてモーセが殺されなかつたことは、全く神の加護と大きな歴史的摂理に因るものであつた。

1月17日

モーセの召命と神名

(出エジプト3:1-15)

神モーセに曰ひ給ひけるは「我は在りて在らしむる者なり」(出三・一四)

モーセは羊群を牧して曠野を西へ南へ、そして遂にシナイ半島の神の山ホレブ(シナイ)に至り着いた。ふと見ると茨の灌木が燃えている。更に驚いたことには神の使者がその中に現われた。彼は近づいてみた。するとその靈火の中から声がした「モーセよ、モーセよ」、「ハイ！」更に神の声「此処に近よる勿れ、汝の足よりサンダルを脱ぐべし。汝が立つ処は聖地なれば」。更に神の声、「我は汝が父祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神なり」。イスラエルをおのが選民として導く歴史の神の顯現である。この神はエジプトに於けるイスラエル民族の苦しみの号呼（きごう）を聞いて彼らを助け出さんとてモーセに現われたわけである。そして彼に救出の天命を下した。モーセは自分には出来ないと答えた。神は「我れ汝と共に在り」と実力の裏付けを宣した。モーセは、では参ります。彼ら同胞があなたの御名を問うたら何と答えますか。これに対して神は「我は在りて在らしむる者なり」と称えよと。原語の一般の訳は「我は在りて在る者」とか「我は在りという者なり」である。私が敢て提題の如く訳したのはある夏の夕、陽光が雲間を貫いて指しかかった瞬間「ああ太陽が在るので地球が在らしめられているのだ！」と地球がニュートンの林檎と化した。それでモーセへの神の名の奥義は、神の存在が一切を在らしめている名と悟ったからである。

1月18日

過ぎ越し

(出エジプト11:4-12:51)

その血汝らのため汝らが其処なる家に居る徴となりて、我れその血を見ると汝らを過ぎ越しさん(出二・一三)

ヨセフ族中心のイスラエルの子孫は埃及王朝の専政のもとで和泥、煉瓦造り、田畠耕作、灌漑工作、要塞工築等の苦役に従事し、是れに耐え、人口も増大するので、産婆にヘブル産婦の男児を殺せとの指令が下る。併し産婦らは憐んで殺さなかったので、庶民に男の乳児を溺死させよとの下命。それで多くの男児の生命が絶たれた。

一方エホバはモーセを通して霊的な徴を次々と示して埃及を驚異と戦慄に搖ぎ込んだ(出七―十章参照)。時機満ちて神はモーセに出エジプトを命じ給う。その際、無疵の当歳の牡の羔を選んで夕にこれを屠り、その血を家の門口の両傍の柱と鴨居に塗り、肉は火で炙いて酔なしのパンも焼いて、「腰をひきからげて足に鞋を穿き、手に杖を執って」急いで食べて出エジプトの旅に出でよ、というのであった。その間、神の使者が血染めでない家は埃及人の家だからその長子を殺した。これはエホバの復讐であった。イスラエルの家の前を神の使者は過ぎ越しして彼らを助けた。

この歴史的救済を伝承して過ぎ越し節(パサハ)がアビブの月(今の三月)の半に行われる。福音の世界では神の羔、キリストの贖罪の血のゆえに、罪びと我らは過ぎ越されて救われた!

1月19日

出エジプト (上)
(出エジプト12:29-14:14)

「汝ら懼るる勿れ、立ちあがれ、エホバが今日汝らのために為し給ふ救を見よ。……エホバ汝らのために戦ひ給ふ、汝らは静まりて在れ！」(出一四・二三、一四)

モーセがイスラエルの民に過越の恵みを受けさせている一方、エジプトの民の長子は、^と神の使者の手で滅された。モーセを総指揮者とする選民はナイル河の三角洲の東方ゴセンの地を出て出エジプトの旅にのぼった。羊牛なども引き伴れた大群衆である。エホバは日中は雲の柱をもつて彼らを導き、夜陰には火の柱をもつて彼らを照らし、昼夜兼行で前進せしめ給うた。ゴセンの地が空虚になったのを知ったエジプトの王バロは戦車六百輛を先陣として大軍を以てモーセの大群を追跡させた。神の民は蘆の海の西岸ピハヒロテで幕屋を張ったが、追跡軍の迫り来るを見て、モーセに、曠野で死ぬよりエジプト人に仕えている方がよかったのに、と咳きわめいた。

これに対してモーセは「懼れるな！ エホバが今日なし給う救を見よ！ ……エホバが汝らの為に戦い給う、静かにして居れ！」と。この静かにして、は黙って深く祈って居れの意である。

渡るべき橋も、乗るべき船もない海を前面にしている絶望的窮地に在って、モーセの神信頼は神の本願の靈力に懸けられていた。「我汝と偕に在り」の神の現在に包まれていた。全身が神に抱かれていた。神在まして我無き白熱の現実であった。

1月20日

出エジプト（下）

（出エジプト14：15—15：21）

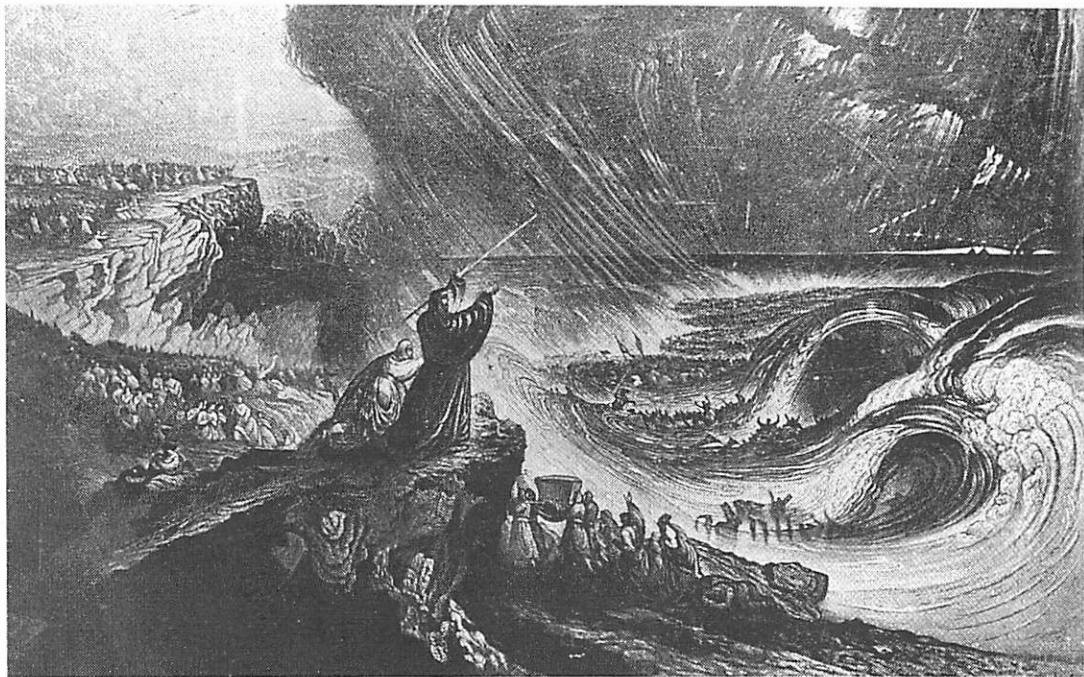
二 エホバ
実存主こそはわが力、わが歌なり、彼はわが救となり給へり（出一五・

イスラエルの陣營を導いていた雲の柱は、陣營の後に立ってエジプトの陣營の前途に立ちだかつたからエジプト軍は進むに進めなくなり夜を迎えた。その間モーセは神命により手を海の上に伸べると烈しい東風が吹き始め、海の波を左右に分けて海水の牆を形作って海底をあらわした。それで神の民は海底を通って対岸に涉った。勿論この地点は蘆の海の比較的浅いところであつたにちがいない。夜明けの頃、また神命によりモーセが海の上に手を伸べると水の牆が風向きの変化と共に崩れてエジプトの軍勢は海水に吞まれて戦車や軍馬諸共潰滅した。

この勝利に感激してモーセとイスラエルの民は声高らかに神を讃美した（出一五・一一八）。

「エホバこそはわが力、わが歌なり、彼はわが救となり給へり。エホバよ神の中に誰が汝に如く者あらんや。汝はその贖ひし民を恩恵をもて導き汝の力をもて彼らを汝の聖所に導き給ふ。」

モーセによる出エジプトはイスラエル民族をその隷属の苦境から解放して自由を与えた歴史的恩恵の事実であつた。アブラハムの出ハランは旧き伝統因習からの解放であり進展であつた。個人の人生でも、伝統を乗り越え、苦境を突破して、進展し創造してゆくには、神・キリストの力の中に我し投身することを要する。福音はこの力にある。



(出14；15) モーセによるイスラエルの民の出エジプト：「わが力、わが歌はエホバなり、彼はわが救いとなり給えり」

1月21日

十言（上）
（出20：2-12）

序言 我^なは汝^なが神^エ実存^{ホバ}主^バ汝^なをエジプトの地その僕^{しもべ}たる家より導き出せし神なり（出二〇・二）

第一言 汝^なにはわが面^{かお}の前^{あだし}他神^{かみ}在^あらじ（出二〇・三）

第二言 汝^ながため偶像^{エカバ}を彫^うるまじ（出二〇・四）

第三言 汝^なが神^エ実存^{ホバ}主^バの名^なを空^くしくは言^{こと}挙げ^あすまじ（出二〇・七）

第四言 汝^な安息日^{サバト}を憶^{おも}えてこれ^{これ}を聖^ホとせよ（出二〇・八）

第五言 汝^なが父^{ちち}を汝^なが母^{はは}を敬^{やぶやう}へ（出二〇・一二）

所謂「モーセの十戒」であるが、原語では神からモーセへの「十言」である。（申命記四・二三）。十ヶ条の断言命法で、その精神は神とイスラエルの人格的恋愛関係を基とした十言である。人格関係に於ける契約の保証として与えられた。しかもこの十言の裏付けは、モーセをして出エジプトの大業を果たさしめた神の霊的な恩恵の業であった。正に「元始に業ありき」で言は業の霊的実力から発したものであるから正に「わが言は霊なり生命なり」（ヨハネ六・六三）である。神はイスラエルの民を愛し信じて語っているので、本来道徳的な律法的な誠ではない。モーセの律法の根本精神は隠れた福音である。それを所謂律法にしてしまったところに歴史的な誤りがある。

1月22日

十言（下）
（出20：13-17）

第六言 汝殺人せじ（出二〇・一二）

第七言 汝姦淫せじ（出二〇・一四）

第八言 汝盜まじ（出二〇・一五）

第九言 汝その隣人に偽りの証を立てじ（出二〇・一六）
あかし

第十言 汝その隣人の家を貪らじ（出二〇・一七）

モーセへのこの十言はシナイ山が雷鳴雷光に全山鳴動する中でモーセに授けられた神の啓示である（出第十九章）。十言の前半は神との縦の関係、後半は人間の横の関係のもの。

第一言、神とイスラエルとの一対一の人格関係、拜一神教である。第二言、神実存主は靈神、無相の相であるから偶像彫刻はできない。第三言、これを違つてユダヤ人は經典を読むとき神名を読まないで「主」と読む。第四言、安息日を嚴守して仕事も煮炊も運転もすべてやらない。専らシナゴークで經典中心の礼拝をする。第五言、人間界の縦の関係で父母に対する敬愛関係は宗教と道徳を結ぶ要の如き関係である。日本に於て孝道は見直されねばならない。第六言、人間関係の最大の罪殺人、第七言、姦淫、第八言、盗み、第九言、偽り、第十言、貪り。これらは我れ神の前で犯すことなかるべしとの信愛の宣言である。神の信愛を裏ぎっているのが人間である。罪の罪は神との関係が切れていることである。魂があるとは万人宗教人であること。自覺せられよ。

1月23日

偶像礼拝
(出エジプト32)

エホバ
実存主モーセに言ひ給ふ「我れこの民を觀たり、視よ是は項の強き民なり」(出三三・九)モーセ、エホバに歸りて言ふ「噫、この民は大いなる罪を罪せり。即ち彼らはおのれがため黄金の神を作れり」(出三三・二三)

モーセがシナイ山に登ったまま、なかなか下山して来ないので、モーセの兄アロンに民は、我らを導く神を作ってくれと願う。アロンは民の身につけている金の耳環を採り外させて金の鎖を鑄作し、これを神として拝ませ、これに犠牲を献じて、これが我々をエジプトから導きのほって来た神だと宣言した。

神はこれを見てモーセに、何と「項の強い民だ」と歎いた。モーセは彼らの營に近づくと金の鎖の偶像を中心にして乱舞しているありさまを見て怒り、十言の律法の二枚の板を擲つて碎いてしまった。この偶像礼拝のため三千人が処罰されて滅びた。モーセは山に立ち歸つて神に民の罪のため謝罪して、もしお赦しなくば、神の書の中から自分の名を抹殺して下さいと祈った。モーセはその後、民の背神の罪を負つて、約束の地を眼前にしなから、ヨルダンを渡ることができず、ピスガの山頂で死を賜る(申命記四・二一―二四)。嚴かな「十言」のゆえに、キリストの贖罪死の前兆を律法のモーセが身証したわけであった。我々現代人は果してこの「金の偶像」を笑い得るか。個人も社会も世界も金の偶像その他諸々の偶像、要するに慾心の偶像の奴隷ではないのか。

1月24日

幕屋（上）

（出エジプト33：7-11）

モーセ幕屋を採りて是を營の外に張り、營の遙かに離れしめ、是れを会合の幕屋と名づけたり。（出三三・七）

父祖アブラハム以来、イスラエルの民は遊牧民族であるから天幕（幕屋）を張って旅をしていた。しかも彼らは神を牧者とする羊群の意識をもっていた（詩篇二三）。

出エジプト以来約束の地カナンへの幾年かの曠野の旅において、特にシナイ山で「十言」（律法）を啓示されてからは神との深い祈りの会合の場としての幕屋が必要となつて来たので、モーセは一般の幕屋的な營の外に、離れた然るべき場所に幕屋を張った。そしてそれを「会合（集会）の幕屋」（幕屋会合の）と名づけた。これはやがて神殿的な幕屋構造に展開してゆくが、また他面ではシナゴグ（ユダヤ教の礼拝の場）の源とも考えられる。それはまたキリスト教に変転したときエクレシヤ（教会、文字通りには「神に」召された者の団体、即ち召団）の場となった。大切なことは神との出会いであって、祈りなきところに「会合の幕屋」も「神殿」も「シナゴグ」も「教会」も「召団」もない。そして幕屋は動的な旅の相であるところに神の歴史の歩みがある。「我はイスラエルの子らをエジプトより導き出せし時より今日に至るまで家（神殿）に住みしことなし。ただ幕屋と奥幕屋の中に歩み居たり」（サムエル後書七・六）。

1月25日

幕屋（下）

（出エジプト25：1—31：17；
35—40） P

三 汝贖罪所（カッポレト）を櫃（アーローン）の上に据え、わが汝に与ふる律法（エードウート）を櫃の中に蔵むべし^三 其処にて我汝に会ひ贖罪所の上より律法の櫃の上なる二箇のケルビームの間より我れイスラエルの子らの為にわが汝に命ぜんとするすべての事を汝に告げん（出二五・二一、二二P資料）

宗教の歴史を見ると東西古今概して動的状态から静的状態を固定化し、単純な形相から複雑な構造へと移行してゆく。幕屋を張りながら靈的な神と一如的な在り方で旅をしていたアブラハムの無相の相的なすがたが本當は一番すばらしい靈的生命的なものであった。

ところがモーセの時代となると民衆の数も増え、神を特に礼拝せんとする会合（集会）の幕屋を作ることになったことは既述の如くである。その幕屋が聖所となり、柱、幕、器具、献物等の様式が後代には規定されるに至った（出二五・一—五P資料）。律法が櫃に蔵められ、純金の贖罪所がその契約の櫃の上に設けられ、贖罪所の両側にケルビーム（神の臨在を示す天使的相形）を置き、相對して翼を伸べ贖罪所を掩い、ケルビーム（複数形）の顔は贖罪所を見るように構成した。神はそのケルビームの間からモーセに語ってイスラエルの子ら（子々孫々）に伝えるというのである。

しかし右の構造の内的な意義は深い。即ち律法を犯した罪は贖われねばならない。その預言的啓示はキリストの十字架で成就された。贖罪所が律法の櫃の上にあることは、旧約の宗教が新約の宗教によって成就される姿で、幕屋の聖所がこれを啓示していたわけである。

1月26日

シナイ契約

(出エジプト19-24)

五 今や若し確かとわが声を聴き、わが契約を遵らば、諸国民に優りてわが宝たるべし。全地はわが有なればなり。六 汝らは我にとり祭司の国、聖き民たらん。是らの言をイスラエルの子らに告ぐべし。
(出一九・五、六)

イスラエル民族は契約の民 (BUNDES VOLK) と謂われる程に、契約の神を存在の主体としている。ノアの洪水のときも、洪水のあとの虹が契約の徴であった(創九・一二)

神がアブラムと契約を結んだときアブラハム(衆多の父)の意」という名を賜うた。

契約の徴として、男子は生れて八日目に陽皮を割くという割礼を施されることとなった。

今ここに主題となっているのはシナイ契約で「わが声」とは、神の言、シナイ山でモー

セに啓示された十言とこれにつづく「契約の書」(出二〇・二—二三・三三)とに關っている。

契約の保証たる事態は神の言を遵守することで、それが契約を守る内実なのである。

神の意志の表現である神の言は成文律として律法であるが、要するに神意を遵奉すること、体現することがイスラエル人の実存であるから、彼らは宗教倫理的な民である。

これに比すると仏教は概して悟りの哲理であるから宗教哲理的である。日本の武士道は主従関係のもので主君の意志を絶対的なものとするからイスラエルの実存と相通する。かの有名な「生魂には生魂を、目には目を与える……」報復律もこの契約の書の中にある。

1月27日

血の贖罪力
(レビ記17)

げに肉の生魂^{いのち}(ネフェシユ)は血にこそあれ。我れこれを祭壇の上にて汝らの生魂を贖はんがために汝らに与ふ。そは血こそは生魂のために贖ひをなすものなればなり(レビ七・一二)

ノアの大洪水のあとで神はノア一族を祝福して「生めよ(ペルー)増殖よ(レブー)満たせよ(ミレウー)大地を」と勧め、且つ警告を発した。即ち肉をその生魂^{いのち}なる血のまま食べるべきでない、生魂なる血を流す者は人であれ動物であれ神はこれを討す、血は血で復讐される、しかもこの生魂に神の相がある、ということ(創九・一六)。血がこのようなに重んぜられているから、殺人は最大の罪となる。「生魂^{いのち}には生魂を」であるから、殺人者は死刑となる。現代の刑法は概してゆるいようだ。無辜の少女や少年を誘拐・殺害しても死刑にならない場合が多いようだ。被害者も親もこれでは浮かばれない。「生魂^{いのち}には生魂を」が鉄則ではないか(出二・二三)。

さて肉と血は現実には渾然一如の構造だ。「ヴェニス[※]の商人」でシャイロックが参ったのはそのためだった。キリストは最後の晩餐で、わが血、わが肉といつて葡萄酒とパンを且つ飲ませ且つ喰わせたのは霊的生命^{いのち}(血肉渾然の生命)の徴であった。

血に贖罪の力がある消息の預言はイザヤ書第五十三章の「彼は我らの罪の為に傷つけられ、我らの不義の為に碎かれた」(イザヤ五三・五前半)である。この預言を身証したのが自ら^{ひら}煮^じとなったキリストの十字架の血の贖罪である。

1月28日

聖潔法
(レビ記19)

汝らは聖し、そは我エホバ汝らの神は聖ければなり(レビ九・二)
汝おのれの如く隣人を愛す、我はエホバなり(レビ九・一八下)

レビ記は第十七章から第二十六章までが聖潔法の一連であるが、特に第十九章に於て聖潔法の各条項の結びに「我はエホバなり」の一句が腰を据えているのが目立つ。禁令でも命令でもない。むしろ断言的な令法である。その最も基本的な二句をここに掲げたわけである。

「お前たちは聖いのだ、我エホバお前たちの神は聖いからだ」。靈的人格的連繫乃至因果関係をズバリと宣言している。こう宣言されたら文句はない。ああそうだ聖いのだとその本質に気がつかされる。あとは聖なる神に全身を投入する行為あるのみ。これは超道德の世界である。聖くされざるを得なくなるのである。活ける神殿なる神の前に平伏す。

次は「お前は自分を愛するように隣人を愛しているね、我はエホバだよ」という語調。人間の自己愛は本能的な事実である。その本能愛を隣人に投じて愛せざるを得なくするとは、どういう消息か。神が圧倒的に愛しているから、その愛の力が自分の中にみなぎり溢れて、自己愛が消えて隣人を愛せざるを得なくする。キリストは十字架の贖罪愛でわが自己愛を根底に於て贖い給うた。相対的人間小池は罪びとだ、しかしこの罪びとの中から、キリストのみ霊の力の愛が隣人を愛せざるを得なくする。それを体現しなくては生きていられない絶対恩恵の愛である。

1月29日

ヨベルの年
(レビ記25)

汝ら第五十年を聖め、国土のすべての住民に自由を宣言せよ。是れは汝らにとりヨーベールである。だから汝ら各々その所与に帰り各々その家庭に帰れよ。(レビ二五・一〇)

エホバはシナイでモーセにかの「十言」を啓示したが、その第四言、七日目毎の安息日の遵守と連関して七年目毎の「安息年」を設けて、田畠を休ませることを定めた。そしてその安息年の第七回目の翌年の五十年目をヨベルの年として聖別した。「ヨーベール」とは「牡羊の角」のことで、牡羊の角笛を七月十日、即ちニサンの月から七月目、ティシュリーの月、太陽暦の九月十日の交が新年で、この正月の十日に角笛を全国に吹き鳴らして、国土のすべての民に自由(デロール)を告げ知らせよ、という神命である。

すべてのものは神有である、という大前提をいかなる所有も権限も本質的に犯してはならない、という発想から来ている。不当な私有、貧富の格差の是正される年である。種々の土地、田畠の所有貸借関係、資本と労働の雇用関係の自由解放の年である。要するに神の下における人間としての自由平等の精神の復帰である。ヨベルは「自由の歡呼」を意味する言葉となった。ドイツ語のユーベルが正にそれである。ユビレウム(Jubiläum)は記念祝祭を意味する(特に五十年、百年の)。ともあれ、安息日には行事一切を休み、七年目毎に興味や研究の自由を各個人に与えることを日本の社会は確かと設定すべきである。

1月30日

一房の葡萄の谷

(民数紀略13:14)

イスラエルの子らは其処から葡萄の房を伐り採って来たので、その処を「一房の葡萄の谷」(ナハル・エシュコール)と称えた(民一三・二四)。

カナンの地、今のイスラエル国のパレスティナに侵入する時が近づいて来た。それでモーセは十二支族即ちルベン、シメオン、ユダ、イッサカル、ゼブルン、ヨセフ、エフライム、ベニヤミン、ガド、アセル、ダン、ナフタリの各支族の牧伯一人づつを撰んで斥候とした。十二支族が一団となって往く団結力養成のためでもあったろう。

彼らは南部チンの曠野から、北部レホブにまで及ぶ諸方面を探索した。エルサレムから三十余軒南方のヘブロンは一際目立つ都であったが、その南方のとある谷間で見事な葡萄の一房を枝ごと伐りとってこれを杠に懸けて二人相前後して担いで帰って来た。イスラエルの子らはその処をナハル・エシコル(葡萄房の谷)と称っている。葡萄はカナンの極めて重要な樹、その汁は血の徴である。これを採って来たことはカナン征服の前兆と見て可い。

ユダ族の斥候カレブとエフライム族のホセア(改名してヨシシュア)の二人は勝利を信じたが、他の者たちはカナン先住諸民族を怖れた。モーセは勿論神の導きと力を信じて突き進んだ。この信、不信の劇的な問答とその結末が第十四章にある。神の外何ものも懼れない者は勝つ! モーセと、彼の後を継いだヨシシュアは神を力として生涯を貫いた信仰の勇者であった。



(民13：1—29) カナンの地への斥候二人、葡萄の房を担って帰る：エシコルの谷。

1月31日

逃れの町

(民数紀略35：9-33)

(ヨシュア記20：1-9)

汝らのために町を撰んで逃れの町となし、誤って人を殺した者を其処に逃れしめよ。(民三五・一二)

過失致死罪の人が、血の報復を逃れるために設けられた法の一つである。故殺人(意志的な殺人犯人)は当然、生魂には生魂で死刑であるが、過失で結果が殺人となった過失致死罪の人は特定の町に逃れて身を保つことのできる赦しの法である。(申一九参照)

それには六つの町がイスラエルの子ら(「子ら」とは人々、市民などの意)と他国人及びその中の寄寓者にとつて逃れの場と決められた。逃れの町はどれも裁判官たるレビ人の町である。逃亡者がそれらのどの町にも一日路で逃れ入れる距離に配備されていた。

キリスト教の世界では、身の危険を避ける場合、教会堂の中に修道院の中に身を隠すことができる。法律上の処置はともかく、宗教的な見地からは、逃れの場として、罪のゆるしという恵みの角度から、逃れの町、教会堂があるわけである。

純粹に宗教的な信仰の生活に於ては詩篇四六・一の有名な句が逃れの場である。

「神はわれらの避け所また力なり、なやめるとき最と近き助けなり」キリスト者に於ては、キリストが避け所である。十字架の贖罪を以て具体的にいかなる危険に対しても、犯罪に対してもキリストは十字架を以て無条件に包み込み、抱き入れて下さる。いかなる人も十字架のキリストにゆるされ包まれている者を審くことは出来ない。全き逃れの懷である。